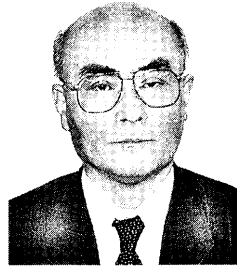


「発展的な学習」をどう進めるか

発展的な学習の充実に向け 指導体制をどう整備するか



上越教育大学教授

高田喜久司

「確かな学力」の向
上と発展的な学習

完全学校週五日制のもと、新学習指導

要領による教育が本格的にスタートし

た。「ゆとり」のなかで、「生きる力」の

育成を基本理念とする新しい学校教育の

幕開けである。

対応のポイント

- ① 文部科学省は学習指導要領を「最低基準」と規定し、進んだ子に対して基準を超えた内容を指導する「発展的な学習」を提言した。
- ② 「発展的な学習」は確かな学力の向上をねらいとし、今後さらに「個に応じた指導」の充実を図っていかねばならない。
- ③ 「発展的な学習」の指導体制の整備は、発展的な学習を教育活動全体のなかにごう位置づけるか等の共通理解を図ることが大前提となる。
- ④ 「発展的な学習」の内容を確定するためには、指導内容の系統性や発展性を把握し、発展的な教材を開発しなければならぬ。
- ⑤ 「発展的な学習」の学習形態や指導方法としては、とくに少人数授業・習熟度別指導による展開が望まれる。

新学習指導要領は、自ら学び自ら考える力などの生きる力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努め

ることを要請している。

る力などの生きる力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努め

周知のように、この学習指導要領はまた、授業時数を縮減するとともに、教育内容を三割削減して構成されたものである。

る。時間的・精神的なゆとりのおかげで、基礎・基本を確実に定着させようと意図したからである。

この意図に反して、「ゆとり」のなかで「生きる力」を育成する学校改革の提言は、なにかとその是非が問われ、批判・反批判をめぐって活発な論議が展開されてきた。とくに、教育内容が減り授業時数も減るゆとり教育では「学力低下」は必至だという考え方が、今なお根強い実情にある。

学力低下を懸念して文部科学省は、今年一月一七日、「確かな学力の向上のための二〇〇二アピール『学びのすすめ』」を発表し、学力向上の具体的方策を打ちだした。

その方策の一つが「発展的な学習で、一人一人の個性等に応じて子どもの力をより伸ばす」という提言である。この「確かな学力」の向上方策の提言にかかわって、二つの見解が注目される。

第一は、学習指導要領の性格を「最低基準」と規定し直したことである。第二は、「発展的な学習」の積極的な導入を促したことである。

まず、「学習指導要領は最低基準である」という見解についての論拠を探ってみよう。アピールでは、「学習指導要領に示す各教科等の内容は、いずれの学校においても取り扱わなければならない」という意味において、最低基準としての性格を有しています」と明記している。

従来は、その基準を超えることも下回ることもできなかった。その意味で、最低基準と規定した点は注目しなければならない。

つぎに、発展的な学習への取り組みについてアピールでは、「各学校においては、児童生徒の理解の程度に違いがあることを踏まえ、学習指導要領の内容を十分理解している児童生徒に対しては、学習指導要領の内容のみにとどまらず、理解をより深めるなどの発展的な学習に取り組ませ、さらに力を伸ばしていくことが求められます」という記述がみられる。

この「最低基準」と「発展的な学習」とは相互に関連することに留意しなければならない。アピールのなかで、「学習指導要領は最低基準であり、理解の進ん

でいる子どもは、発展的な学習で力をより伸ばす」という指摘が、それを確証してくれる。

文部科学省は、学習指導要領を「最低基準」と規定し直したうえで、「理解の速い子」や「進んだ子」に対しては、基準を超えたより高いレベルの学習内容を指導してよいと提言したのである。この基準を超えた学習が「発展的な学習」である。

では、なぜ最低基準としたのか。その要因は、「確かな学力」という文言が象徴しているように、世論の大きな関心事である学力低下論への対応措置であることは明らかである。

子どもの学力低下と最低基準であるという解釈は深くかわる。なによりも、「確かな学力」の向上のための発展的な学習の導入であることを、再確認する必要がある。

発展的な学習と「個に応じた指導」の充実

これまで教育界では、「理解の遅い子」

への対応に腐心してきたが、「理解の速い子」の能力や可能性を生かす配慮が不十分だったのではないかという指摘があった。これは、基準に忠実だったからかもしれない。

発展的な学習の導入によって、「理解の速い子」は速い子なりに基準を超えてその能力と個性を伸ばす場と機会が保障されたといえる。

ただ、発展的な学習が、単に進んだ子どもへの特別な配慮をするための学習方法だと考えてはならない。基礎・基本の確実な定着という課題に対して、理解の速い子も遅い子も満足感を得られるように、「個に応じた指導の充実」を図る学習方法と捉えるべきであろう。

新学習指導要領の「総則」では、「基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と強調されている。今後はさらに「確かな学力」の向上に向けて、個に応じた指導の着実な展開が必要である。

このように発展的な学習は、学力低下論への対応を背景とし、学習指導要領を

最低基準と規定し直し、基礎・基本の確実な定着と個に応じた指導の充実を基本姿勢として導入されたと考えられるのである。

「発展的な学習」の 充実と指導体制

発展的な学習が可能となったことによって、子どもの学習に対するきめ細かで個別的な対応、すなわち習熟の程度に応じた周到な指導がますます重要となる。

ただ、発展的な学習の導入は教師にとって新たな対応であり、大きな負担が伴うといわれる。発展的な学習をどのような展開するかは未開拓なのである。

では、発展的な学習を充実するための指導体制をどう整備すればよいのであろうか。いくつかの留意点をあげてみたい。

(1) 発展的な学習についての共通理解

まず、発展的な学習を学校の教育活動全体のなかにどのように位置づけるかが

重要なポイントとなる。

そのため各学校は、校内研修等によって発展的な学習について共通理解を図る必要がある。すでにスペースをとって触れてきたが、少なくとも学習指導要領の最低基準性や発展的な学習の意義について、理論的基盤を構築することが不可欠である。

その際、発展的な学習は基礎・基本の確実な定着をねらいとし、子ども一人ひとりの個性や能力等に応ずる学習の充実であると位置づける構えが大切である。

発展的な学習に関する理解を深めつつ、さらに教師間の連携・協力体制の確立が不可避といえる。そのうえで発展的な学習内容や個に応ずる指導方法等を整備していくことになる。

(2) 発展的な学習内容の確定と教材開発

つぎに、発展的な学習内容をどう確定し、教材開発を進めていくかがポイントとなる。

学習指導要領が最低基準であるということは、指導内容や教科書はすべての子

どもが達成すべき学習対象であることを意味する。

その内容を達成し、クリアしたあとにより高いレベルの発展的な内容は、教科書には載っていない。各教師は発展的な内容、教科書を超えた内容を含む新たな教材を開発しなければならない。

その際、学習指導要領の内容と教科書の内容を一応の手がかりとして、教師は、指導内容の系統性・順序性や発展の方向性を把握しなければならない。いまここで学習している内容が、つぎにどのような内容に関連し、さらにどう発展していくかを構造的に見直すことである。

指導内容や教科書内容を検討するにあたっては、担当学年の内容にとどまらず、少なくとも隣接学年との関連づけを整理しておくことが望まれる。

発展的な学習のプロセスは、一般に、基本的な内容を理解する段階から練習・習熟を経て発展・応用の段階をたどるものである。

発展的な学習を充実させるためには、共通に学ばせるべき基礎・基本となる内容と発展・応用的な内容を明確に区別

し、教材を開発する必要がある。

発展的な内容の確定にあたっては、新学習指導要領で削除された内容を視野に入れることも考慮されてよい。

ともあれ、学んだ内容を活用したりする場面を想定しながら、基本教材や練習教材、さらに副教材・補充教材とならんで発展・応用教材を開発・準備することになる。

(3) 学習形態や指導方法の工夫・改善

さらに、確定された発展的な内容に関する指導をどのような学習形態で展開するかが問われる。そのため、子どもの学習集団をどのように編成し、指導方法をどう工夫・改善するかについて事前に慎重に検討しなければならない。

これらについて新学習指導要領の「総則」では、具体的に個別指導やグループ指導、繰り返し指導、習熟度別指導、ティーム・ティーチングなどの指導方法や指導体制を例示している。例示を参考に有効・適切な学習形態を案出することになる。

理解の速い子はすべての子どもではないため、このうちとくに、理解の速い子どもを一つのグループにした習熟度別指導が一般化すると予想される。さきのアピールでも、少人数授業・習熟度別指導で個に応じたきめ細かな指導の実施を推進しているからである。

習熟度別指導を展開する場合には、グループ編成を長期化・固定化しない配慮が重要である。子どもによるグループ選択やグループ間の移動を可能にする配慮である。また、習熟度別指導の趣旨や発展的な学習の意義を、保護者に十分説明しなければならない。

今後文部科学省は、発展的な学習を支援する教師用参考資料を作成し配布するという。参考資料の有効利用と同時に、理解の遅れがちな子の指導も怠りなく、基礎学力の確実な定着・向上を図る教師の姿勢が肝要である。

〈参考文献〉

高階玲治編『発展的学習の指導の手引き』平成一三年一〇月、教育開発研究所。